

アレクサンドロス伝説

福 田 千 津 子

紀元前356年8月マケドニアのペラの宮殿にフィリポスⅡ世とオリンピアダ王妃の長子として誕生し、⁽¹⁾323年6月13日、バビロンで32年の短かい生涯を閉じたアレクサンドロスは、父フィリポスⅡ世の暗殺後、20才で即位し、334年東征を開始して、東はインダス川にまで到達する大遠征を行い、三大陸にまたがる大帝国を築き上げた。これは、その後、ローマ帝国が出現するまでの約300年間続くヘレニズム文化の礎となり、ギリシア文化の東方への伝播、東方文化との混淆等、文化の発展にも多大の影響を及した。このアレクサンドロス大王の偉業は様々な形で記録され、伝承された。アレクサンドロス伝としては、アリアノスの「遠征記」、プルタルコスの「英雄伝」、クルティウスの「アレクサンドロスの生涯」といった、比較的史実に基づいた伝記の外に、民衆の空想の中で自由に広がり、様々な変容を遂げた伝説的物語がある。以下、一般にアレクサンドロス・ロマンスと呼ばれる、この伝説的物語の系譜を述べる。

アレクサンドロス伝説のオリジナルは紀元前2世紀頃、アレクサンドリアに於いてギリシア語で編纂されたといわれるが、その原本は現存せず、後にこれに依拠して書かれたとされる異本が残っているにすぎない。これはその一部の写本にその著者として、アリストテレスの甥でアレクサンドロスの東方遠征にも参加したカリステネスの名が誤って記されていたことから、偽カリステネスのアレクサンドロス・ロマンスと呼ばれる。これは、その後、次々に転写され、また多くの言語に翻訳されて、北はアイルランドから南はサハラ、エチオピア、西はイベリア半島から東はジャワ、セルベスにまで達し、ヨーロッパ・中近東・東南アジア24ヶ国語、⁽³⁾80種以上の異版となって流布した。⁽⁴⁾

偽カリステネスの源泉に関してはメルケルバッハに詳しいが、それに依ると、主要源泉としてクレイタルコスに基く通俗史話 アレクサンドロスに関する書簡物語、アレクサンドロスから師アリストテレス、母オリンピアダに宛た手紙、アレクサンドロスの最期に関する話、インドの哲人との対話が挙げられ、二次的源泉とされるネクタナボスに関するエジプト伝説等と一体となってアレクサンドロス伝説が成立した。

偽カリステネスの系統

偽カリステネスのテキストは下記の四系統に大別される。⁽⁵⁾

(1). α -本。紀元後300年頃に遡るもので、現存する最古のギリシア語テキストはパリ国立図書館のギリシア語写本No.1711(11世紀)であるが、これ以外に、 α -本と密接な関係にあるとされる翻訳本が現存する。この中で最もオリジナルに近いとされるのがアルメニア文学の黄金時代と呼ばれる紀元後5世紀にアルメニア語に翻訳された訳本である。更に、紀元後320—330年にユリウス・ヴァレリウスによって翻訳された最古のラテン語訳「マケドニアのアレクサンドロスの偉業」(*Res Gestae Alexandri Macedonis*)もこの α -本からの翻訳で、中世ヨーロッパ世界に広く流布し、多くのアレクサンドロス伝説の底本となった。この α -本はエジプト色が濃厚である。

(2). β -本。 α -本に改訂を加えて、伝説を史実に近づけようとしたもので、紀元後300—550年に作られ、エジプト的色彩が弱まり、ギリシア化していること、文体的簡素化という特色を持つ一方で、東方の国々での不思議な出来事に関する物語の比重が大きくなっている。 β -本に属する写本は全て11世紀から16世紀に書かれたもので現存するギリシア語写本の大半はこれに属している。この系

統に属する翻訳本として、12世紀頃翻訳されたブルガリア語訳があり、これは更にロシアに伝えられて年代記の中に収められた。

(3). γ 一本。 β 一本の延長線上にあるもので、ミューラー写本を代表とする幾つかのギリシア語写本が現存する。全体的にユダヤ的色彩が強く、一神教の信奉者としてのアレクサンドロスが強調され、⁽⁷⁾紀元後7世紀にアレクサンドリアのユダヤ人もしくはそれに近い筋の人によって書かれたとされる。⁽⁸⁾

翻訳本として、14世紀にスラブ世界に広まったセルビア版アレクサンドロス伝説もこの γ 一本に拠る。

(4). 最後に δ 一本と分類されるものがあるが、これに属するギリシア語写本は現存せず、訳本のみが残っている。これは α 一本と極めて近い関係にあり、 α 一本の中に一括する研究者もある。⁽¹⁰⁾

訳本の中で最も重要とされるのはナポリのレオ大司教によって10世紀にラテン語に訳された「アレクサンドロス大王の生涯と勝利」(Natiutas et Victoria Alexandri Magni)で、一般に「戦記」(Historia de Preliis)として知られ、多数の写本が現存している。12世紀になると、これはユリウス・ヴァレリウスのラテン語訳及びその簡略版であるEpitomeに代わって、ヨーロッパに於けるアレクサンドロス伝説の底本として大きな役割を果たした。

ロシアに於けるアレクサンドロス伝説

アレクサンドロス伝説は2つの経路を経てロシアの地に伝えられた。1つは年代記の中にその一部として含まれているもので、他の1つはセルビア版アレクサンドロス伝説である。後者がアレクサンドロス伝説として独立した物語であるのに対して、前者は常に年代記の一部として存在している点に両者の最も大きな違いがある。

年代記のアレクサンドロス伝説

これに関してはイストリンが詳細な研究及び5つの異本のテキストを発表しているので、⁽¹¹⁾それに従う。

年代記の中に含まれるアレクサンドロス伝説は偽カリステネスの β 一本に属するギリシア語テキストから12世紀以前にブルガリアもしくはロシアの地で翻訳された。この翻訳に使用されたギリシア語テキストは限定できないが、ライデン本(L写本)が最も近いとされる。その後(12-13世紀)，これにハマルトラスの年代記から借用されたアレクサンドロスのエルサレム訪問のエピソードが付加され、更に、その後マララスの年代記と一緒にになって、その一部として存続する。このマララスの年代記に各々異なるエピソードを付加した写本がギリシア年代記の第一の異本を始めとする幾つかの写本群で、これを年代記のアレクサンドロス伝説の第一の異本とする。

第二の異本とされるのはギリシア年代記の第二の異本の中に含まれるアレクサンドロス伝説で、ギリシア年代記の第一の異本に「ハマルトラス年代記」「マララス年代記」「メトジウスの告白」「インド王国の物語」「3人の僧のマカリヤ訪問」「ゾシマのラフマニ訪問」「フィジオログ」「プチエラ」を下敷とした追記を加えたもので、恐らくロシアの地に於いて、セルビア版アレクサンドロス伝説伝来以前の15世紀前半に成立した。内容的には、全体を通じて運命に対する従順さ、人間の無力といったペシミスティックなトーンがあり、タールの輻に苦しんでいたロシア社会の反映とされる。

15世紀に成立する謂わゆるロシアの年代記の第一の異本はその構成上、章分けの有無によって二分され、その中に含まれるアレクサンドロス伝説を各々アレクサンドロス伝説の第三・第四異本とする。これはギリシア年代記の第二の異本を簡略化し、セルビア版アレクサンドロス伝説から借用されたエ

ピソードを加えたもので、第三異本は15世紀末、第四異本は1512年に成立した。

年代記のアレクサンドロス伝説の最後の異本でもある第五の異本はロシア年代記の第二の異本のうち一般に余り流布しなかったグループの中に含まれているもので、1617年に成立した。これはアレクサンドロス伝説の第四異本を簡潔にし、新に、ポーランド語から訳した「マルチン・ベリスキ年代記」「アレクサンドロス伝説の第二異本」「秘中の秘」から借用されたエピソードを加えたもので、この第五異本をもって偽カリステネスの^β一本から続いてきた物語は姿を消し、以降はやっぱセルビア版アレクサンドロス伝説が流布することになる。

セルビア版アレクサンドロス伝説

15世紀半ばに年代記の中に取り入れられたセルビア版アレクサンドロス伝説は偽カリステネスの^γ一本に属するギリシア語テキストを基盤にして翻訳されたもので、この元になったオリジナル・テキストは現存しないが、これを共通のオリジナルとする現存テキストとして、ウィーンにあるギリシア語写本⁽¹³⁾、現代ギリシア語大衆本、更にそのセルビア語訳、ブルガリア語訳⁽¹⁴⁾が現存する。

オリジナルのギリシア語テキストは13—14世紀にグレコ・ビザンツの地で成立し、セルビア語への翻訳は14—15世紀にセルビア文化圏で行われた。これらはその後スラブ世界に広まり、14—19世紀に亘る約350の写本が現存する。⁽¹⁵⁾

このセルビア版アレクサンドロス伝説がロシアの地に入るには早くても15世紀で、ロシア文学に対する第二次南スラブの影響によって現われた作品の1つである。ロシアの地に入ったセルビア版アレクサンドロス伝説はその一般読者受けのするロマンス的要素によって民衆の間で人気を博し、以前から存在した歴史的色合いの強い年代記のアレクサンドロス伝説にも組み込まれ、遂にはそれに取って代ることになった。

以上の偽カリステネスの系統及びロシアに於けるアレクサンドロス伝説をまとめると別図の様になる。

注：

- (1) W.W. TARN, *Alexander the Great*, vol. 1. Cambridge, 1979, p. 120.
　　ブルタルコスではダイオシスの月の下旬の第三日の夕方となっている。(英雄伝第9巻76)
- (2) G. CARY, *The Medieval Alexander*, Cambridge, 1956, p. 9.
- (3) W.W. TARN, 上掲書, P144
- (4) R. Merklbach, *Die Quellen des griechischen Alexanderromans*, München, 1977.
- (5) この分類に関しては、主として Cary の前掲書に拠る。
- (6) Merklbach, 前掲書 p. 59.
- (7) *Pseudo Calistenis Historiam fabulosam ex tribus codicibus nunc primum edidit Carolus Müller*, Parisiis, 1845:
- (8) A.C. Орлов, *Переводные повести феодальной Руси и Московского государства XII-XVII веков*, Ленинград, 1934, p. 10.
- (9) CARY, 上掲書 p. 10, D. Holton, *Διῆγησις τοῦ Ἀλεξανδροῦ*, Θεσσαλονίκη, 1974, p. 9.
- (10) HOLTON, 上掲書 p. 6.
- (11) В. Истрин, *Александрия русских хронографов*, Исследование и текст, М. 1893.

- (12) Гудзий, История Древней Русской Литературы, 1966, р. 160.
- (13) Διῆγησις καὶ Γέννησις καὶ ἡ ψήφισμα τοῦ Ἀλεξάνδρου,
この全文が A.N. ベセ洛夫スキーによって発表されている。(Из Истории романа
и повести. Материалы и исследования, 1886)
- (14) ブルガリアでは1840年代に、ギリシアの影響により、アレクサンドロス大王の生涯に関する物語
に関心が集まり、1844, 1851, 1867, 1870, 1905年とギリシア語からの翻訳が出版された。
(Л. Милетичъ, Една Българска Александрия отъ 1810 год, София,
1936, р. 20)
- (15) Веселовский, 前掲書. pp. 444-445.
- (16) Орлов に依ると、スラブ・ビザンツ・ローマ文化の交流点で13世紀頃文学活動が盛んであつたダルマチア沿岸で翻訳された。(前掲書P23).
- (17) Р. Маринковић, Српска Александрида, Историја основног текста,
Београд, 1969, р. 337)
- (18) Я.С. Лурье, Средневековый роман об Александре Македонском в
русской литературе XVв. в кн. «Александрия, роман об
Александре по русской рукописи» 1966.

А Л Е К С А Н Д Р И Я

1-ая Редакция Александрии

β-recension of Preudo-Callisthenes

Александрия без
иерусал. эпизода
(XII в.)

Александрия с
иерусал. эпизодом
(XII-XIII в.)

Малала
(X-XI вв)

Амартола
(X-XI вв)

Соединение Александрии
с Малалой (XII-XIII)

1262 г

Виленский список

Оригинал Архивского

Архивский список

1-ая Редакция
Эллинского
Лет. (XIV-XV)

Амартола

2-ая Редакция
Эллинского Лет.
/2-ая Редакция
Александрии/
(XV)

1-ая Редакция
Хронографа

не разделенный
на главы
/3-ая Редакция
Александрии/

разделенный
на главы
/4-ая Редакция
Александрии/
(1512 г.)

2-ая Редакция
Хронографа
/5-ая Редакция
Александрии (1617 г.)

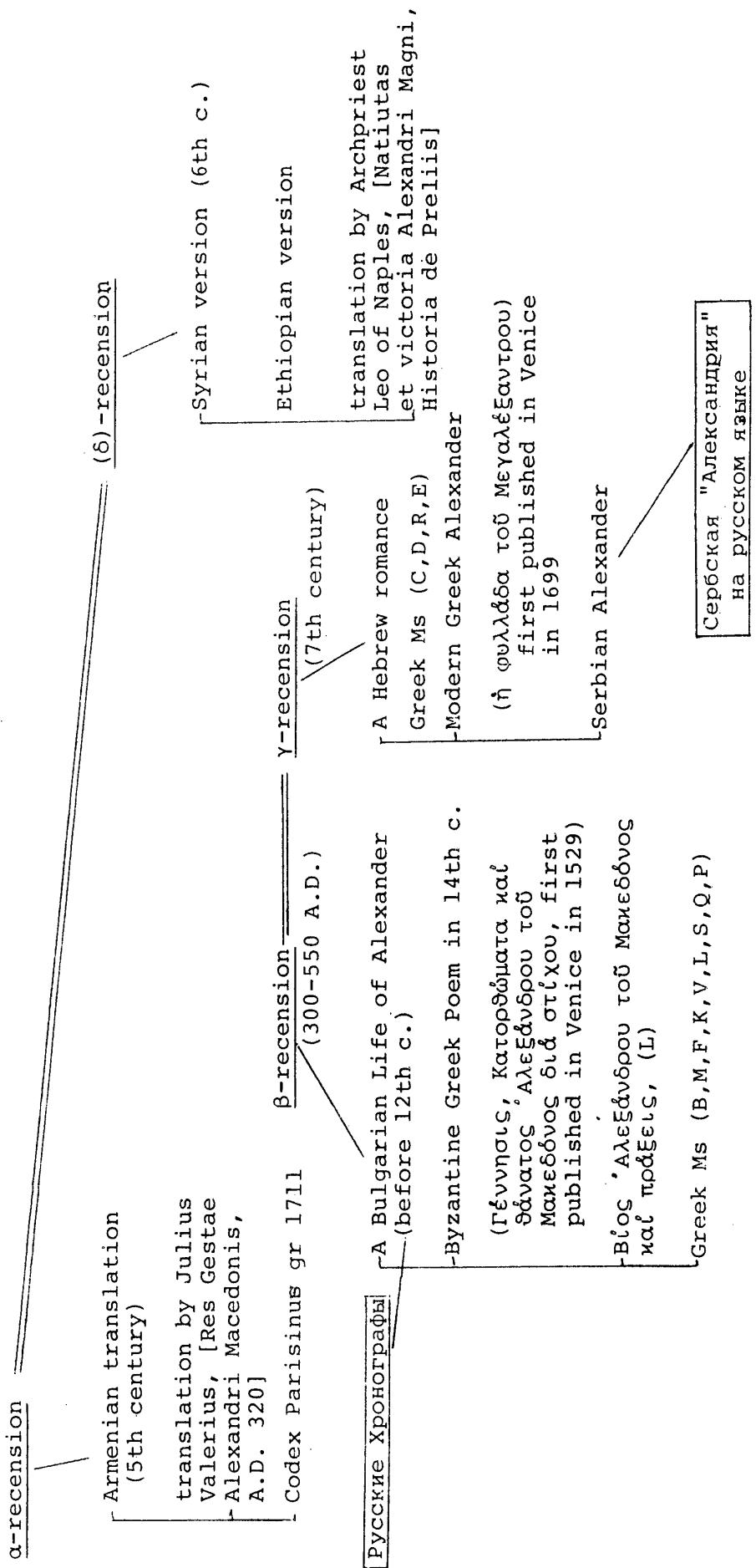
γ-recension of
Pseudo-Callisthenes

Оригинал Сербской
Александрии (XIII-
XIV)

Перевод Сербской
Александрии в
слав. яз. (XIV)

Сербская Александрия
на русском языке
(XV)

4 recensions of Pseudo-Callisthenes



Сербская "Александрия"
на русском языке